

紀州若一王子の黒箱

宇野脩平

一九五六年三月、文化財保護委員会は、和歌山県那賀郡粉河町東野四〇九番地、若一王子社宮講の所有する「名つけ帳・黒箱一式」を重要民俗資料として指定したが、こゝにその黒箱と、黒箱に保存される古文書を通じて鎌倉時代以来の村の生活について述べてみたい。

黒箱くろばことは紀州において、庄・座・村あるいは社寺など伝統的な団体の所有する重要文書を保存するための木箱であつて、その外側を黒く塗つてある所から黒箱とよばれ、民俗資料として注目に値するものである。私は幼時から自分の家や親戚で黒箱をあずかっているのを見たり、老人たちの話によく黒箱ということばが出るのを耳にしたりしてきたが、その内容を実際にみたのは一九三五年、まだ大学へも進まない時代のことであつた。

そのころ私はひとりで古文書の勉強を始めていたが、あちこち古文書を見せてもらつていゝうちに、一二の村で黒箱にぶつつかり、どの村にも黒箱というものがあるらしいことがわかり、紀州の黒箱を全部しらべてみたいと思つたことであつた。

しかしどの村でも黒箱の存在を知つてゐるのはごく少数の人々で、その所在も常に転々とする上、その開函は年中行事的儀式と伴つてゐるの

で、年に一度というものが多く、その一度も同じ日、同じ時間にとつたのもあつたから、その調査は簡単なことではなかつた。

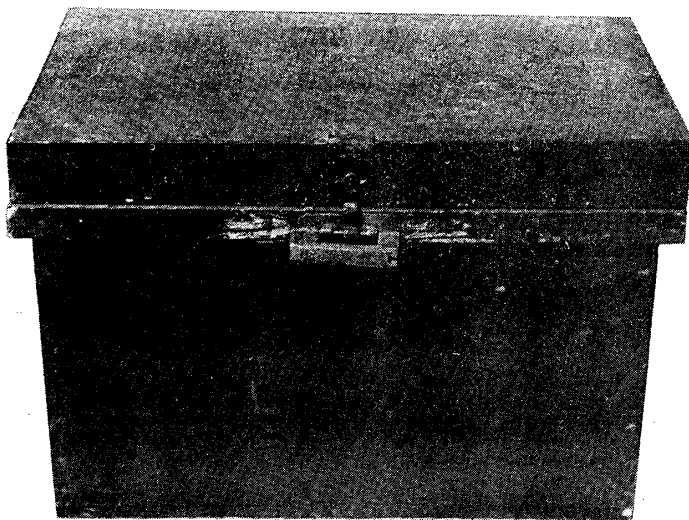
しかしまたそれだけに当時まだ学問の対象になつてなかつた未開の分野——黒箱というものを調べるよろこびはあつた。

ここに紹介する若一王子の黒箱は、そうした黒箱の中でも最も代表的なもので、一九三六年二月三日社掌八塚良三氏の斡旋によつて最初の調査を許されてからもう二十年にもなる。

その間、故中田法壽氏の高野山文書編纂に協力してその一部を提供、発表したこともあつたが、いつも調べさせていたゞくばかりであつたこの黒箱について、このたびようやくその輪郭の第一原稿ともいふべきものを記して、宮講ならびに学界の人々の検討をおおぐことゝなつた。

本篇は一九五六年一月、

若一王子社宮講の代表者林英一、飯田良一、柑本辰造、平林卯一、谷哲雄、杉原清太郎諸氏から文化財保護委員会に対して、この黒箱に文化財保護法による重要民俗資料の指定を申請したとき、参考資料として提出した、黒箱の調査報告書で、この黒箱を通じてみた村の生活については次の機会にゆずりたい。



第一章

東 紀州粉河
野 河

若一王子社について

一 紀州粉河 東 野 河 若一王子社の起源

和歌山県那賀郡粉河町東野四〇九番地に、「宗教法人王子神社」というお宮がある。このおみやがいつごろここにあつたか明らかでないが、すでに弘安元年七月九日の文書⁽¹⁾を始めとして、左記史料によれば、おそくとも第十三世紀末に粉河寺領東村に、「王子」「若王子」「若一王子」などと呼ばれる、若王子または若一王子をまつる神社のあつたことが知られる。

東村はいまの東野であり、室町時代のもとと推定される児玉左京家所蔵粉河寺四至伽藍図に、東野村の北方、山の上に若一王子社と記した社殿がえがかれているのを見れば、東野のこの現在地にすでに年久しくまつられていたことが考えられる。

註 (1) 一、永寶渡常地田畠事、合□□□、在四至在所本券文、字王子御節供料田畠也

二、ニヤクワウシヲノセウそくにんシユ、東村若王子尾山タマワル時人数(嘉元三年三月十日文書)

三、永免除粉河寺東村王子田温屋田事(嘉元四年十一月四日文書)

四、粉河寺東村勝福寺并若王子名田事(正平九年甲午四月一日文書)

五、若王寺キシモス田小ナリ(正平九年甲午十一月廿四日文書)

六、右件荒野者依有志、阿彌陀佛若王子所奉寄進也(正平十三年戊戌六月廿六日文書)

七、右件荒野者依有志、阿彌陀佛并に若王子所奉寄進也(正平十三年戊戌六月廿六日文書)

八、ヲウシテンモンシヨ敬定王子田定年之事(文明五年十二月十八日文書)

九、若一王子神輿左方前後従東村可格也(文明九年六月七日文書)

(2) 和歌山県那賀郡粉河町中ノ才、児玉左京家、八十嶋坊ともいう。粉河寺にも古伽藍図が二軸あるが、児玉家所蔵のものの方が古い姿をつたえていると思われる。

二 この神社の名称

この神社はいま、この土地の人々によつて「みやさん」「こつちのみやさん」、あるいは「王子社^{おうじしゃ}」とよばれ、近郷では「王子のお宮さん」「高野辻のお宮さん^{みや}」とよばれている。

この近在の人々の呼ぶ前者の場合、王子は王子村の意味であり、粉河町に合併される前の村名をとつていい、後者はこの神社の「もとみや」(神社の鎮座する部落の意味。氏子ではあるが、神社の鎮座していない他部落に対していう)の部落である東野が、大和街道から高野街道が分れる地点にある所から、一名高野辻ともよばれるのによつていえる。

明治以後「王子神社」と登録され、第二次世界大戦後「宗教法人王子神社」となっているが、歴史的には前掲史料の示すように、「王子」「若王子」「若王寺」「若一王子」とあつて、使用される場合にもよるのであるが、文書にあらわれた限りにおいては一定していない。きわめて少い例で断定もできないが、時代の下るとともに形式がととのえられてゆき、あるいは形式をととのえる場合、若一王子とよぶようになってゆく傾向があるように思われる。寛文十一年「紀伊大殿様ニ關スル書類」には、「若一王子」または「若一王子権現」とあり、天保年間撰進の「紀伊續風土記」には「若一王子権現社」として記されている。

これが明治初年神仏分離のさい、「若」「若一」が神仏混淆思想の名称であるとの考えから、無難作に「若一」を削つたのであろうか。

ただし祭神をよぶ場合は「若一王子」の名称が用いられ、「ニヤクイ

チ」「ニヤクイツツアン」と発音されている。⁽⁵⁾

註 (1) 和歌山県那賀郡粉河町東野、林英一氏談話(一九五六年一月)

(2) 和歌山県那賀郡粉河町附近において、筆者宇野、幼時よりききなれてゐる。

(3) 一九五五年四月一日合併。

(4) 若一王子社宮講黒箱文書。

(5) 林英一氏談話(一九五六年一月)

三 紀州粉河 東野 若一王子社の勧請

「神の家の小公達は八幡の若宮、熊野の若王子、子守御前、比叡山には山王十禪師、賀茂には片岡貴船の大明神」(梁塵秘抄)という四句神歌のことばのように、若王子は熊野の神々の家の子神であつて、熊野信仰の隆盛とともに、熊野権現の末社が各地に作られてゆく中にも、若王子は早く特別の關係ある所に、本社に分祀として勧請され、あつい信仰をうけたものである。

というよりは、若王子または若一王子の名を以てよばれるものは、熊野神分祀史上早く分祀勧請されたものであつて、初期に分祀されたものはすべて若王子または若一王子の名を以てよばれたが、その中で亡ぶものは亡び、残るものは残つたために、今みる若一王子は古いのみならず、強い信仰をうけ、従つて特別の關係があるようにみえるのかもしれない。徳川時代の文献等にも若一王子として記され残つてゐるものは、由緒も古く、あつい信仰をうけていたように思われるものが多い。

粉河東野の若一王子もまたそうした一つで、勧請された年代は、今の所明らかではないが、鎌倉中期弘安年間の史料にすでに「王子」のまづられてゐることがうかがわれるのみならず、粉河寺内の所謂六社壇に粉

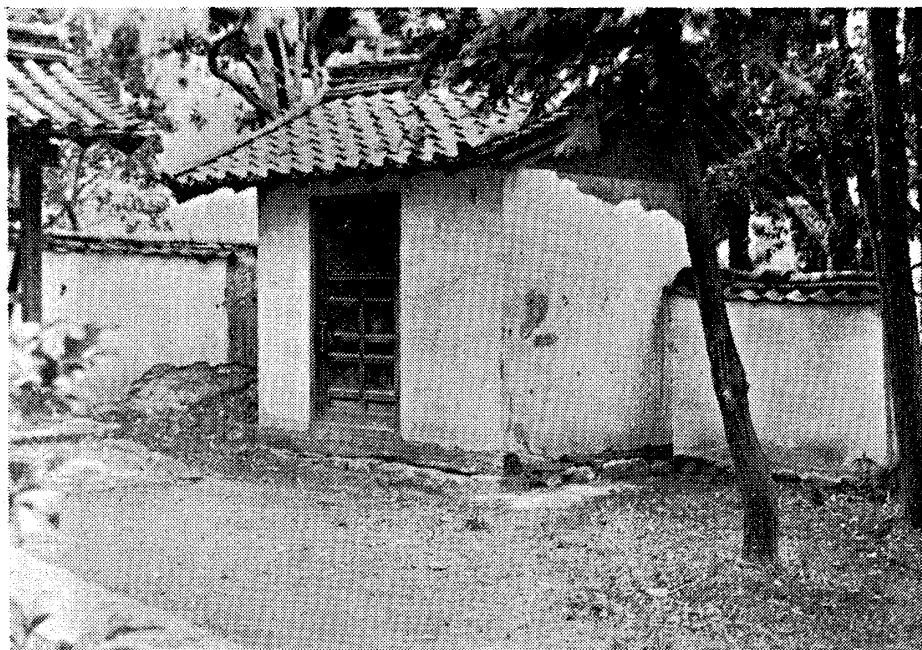
河寺の鎮守として地主神^{たんじょう}丹生明神とならんで若一王子が祀られており、いつたえによれば、この粉河寺六社壇の若一王子は、東野の若一王子を勧請したことになつてゐるのからみても、東野の若一王子は余程古くこの地に勧請されたものと思われる。粉河寺六社壇はすでに延慶年間書写平家物語にみえる。⁽²⁾

そして粉河寺六社壇に若一王子を勧請するについては、若一王子が東野地方の産土神として、⁽³⁾地主神の性格をもつことにもよるのであろうが、むしろ若一王子の本地仏は十一面觀音であつて、⁽⁴⁾東野若一王子の神体の梵字も十一面觀音を意味するものであり、一方粉河寺の本尊は古く、また一般的には千手觀音として知られてゐるが、また中世においては十一面觀音と考えられたことがあり、⁽⁶⁾本尊十一面觀音の垂跡神として若一王子を、地主神^{たんじょう}丹生明神と配祀し、熊野信仰の中でも特に人氣のあつた若王子信仰をとりいれるとともに、熊野の俗的勢力をもとりいれ、丹生明神を地主神とする高野山勢力への抵抗を計つたのではないか。

粉河寺は三井寺を本寺としていたことがあつたが、三井寺の長吏は熊野三山檢校を兼ねていたから、その熊野の若一王子と、高野山の丹生明神とを鎮守とする所に粉河寺の立場があり性格があつた。

そのうえ粉河觀音は童男觀音として現れ、子供の幸福を守る仏として宣伝されていたから、熊野神の子神であり、子供の幸福を守る若一王子とはむすびつきやすかつた。

これが熊野信仰の隆勢に伴い、熊野参詣をねがいつゝも、それを果せず、粉河高野参詣で帰る人々のために、粉河寺より高野山への登りみちにあたる高野辻、東野の地に若一王子を祀る理由であり、粉河寺領が高野山領と接する地、東野に熊野の若一王子を祀る理由でもあつたのではなからうか。要するに熊野信仰の隆盛とともに、東野に若一王子が勧請



され、ほほ時を同じうして粉河寺六社壇にも祀られたのであろう。

なお本地垂迹説によれば、若一王子は天照大神ということになるが、熊野信仰の盛大は逆に天照大神をも子神として包摂したのであつた。そして日の神であるから粉河寺領の東境、東野にまつたのかも知れない。

註 (1) 紀伊国名所図会（天保年間刊）粉河寺六社壇の条に

「此壇上あまたの御社建ならびていと神々しく、中にも鎮守の若一王子権現は東野村より遷し奉り、丹生大明神は名手莊本山より勧請し奉れる所にしてともに大伴船主の本願とかや」

とあり、粉河寺丹生神社の神輿二つのうち一つは、東野若一王子の神輿であつたといわれている。

(2) 應永書寫延慶

本平家物語（大東急文庫所蔵）第五末惟盛粉河へ詣給事の條に

「伏案^レ 神則靈驗

無雙之六廟祠^{シテ}垂

跡一顧ニ本地於遮那

覚海之浦^ニ、佛^ハ又

自然應來之千光眼閣

寶龜一算^フ遠壽於補

陀落界之塵^ニ、寔是

本迹雖^レ異^リ不思議

一也」

とある。六廟祠は六社壇をさすものと思われる。

(3) 東野、井田、池田垣内三部落の産土神。

(4) 神道集（安居院）

(5) 若一王子社宮講所有掛軸（黒箱におさむ）本地仏をえがいたもの二軸はかつて神体とされていたという。その一つは享祿四年正月寄進にかかるものである。

(6) 雪玉集に逍遙院内大臣

「粉河施音寺にまうててをかみ侍れば、堂のさまなと莊嚴巍々として殊勝きはまりなくなむ、本尊は十一面の千手觀音となむ」

四 若一王子社宮講

ほとんどすべての古い神社がそうであるように、若一王子社にも宮講がある。その詳細は別にまとめるが、明治初年には「林治右衛門外三十三名」を以て組織され、土地その他の財産もこの名義で登記されて終戦（第二次世界大戦）後におよんだ。

一九三六年（昭和十一年）二月三日の、宇野の第一回調査当時には、毎年五回の集会が行われていた。すなわち旧暦の正月初午の日、正月十一日、正月二十六日、十月十七日のおまつりの日（もとは九月の午の日であつたが、これを改めた）、および十一月二十六日であつた。

いずれの日もそれぞれの行事があるが、中でも正月十一日は、その前年、宮講員の家庭に生れた男児の名を、古来伝つた巻物（いま名つけ帳とよばれているが、古くは長帳といわれ、また神株帳などともいわれた）につける「帳つけ」の儀式的行われる日として、特に重要であつて、この巻物を始め、その他の重要文書をおさめた「黒箱」という箱も、この日に限つて蔵（大般若経もおさめてある所から般若蔵とよばれる）からもち出され、祝詞、はらいをして（第一回調査当時ききとりした老人の話では、もとは講員全員で般若心経をよんで）、開幽された。

戦後農地解放は、宮講所有の田地をも解放せしめたために、年五回の

集会も行いえず、正月二十六日にのみ年一回の集会が、帳つけと宮講をかねて経営されることになった。この団体は普通に「宮講」とよばれているが、その会合することをも「宮講」といつている。

第二章 黒 箱

一 黒 箱

黒箱とは紀州において、庄、座、村あるいは寺社など、伝統的な団体の所有する重要文書を保管するための箱であつて、その外側を黒く塗つてある所から黒箱とよばれ、ひいては黒く塗られていなくとも、上記の役割を果す箱をも称している。

年へて古び、すすけたために黒箱とよぶようになったと考えられていることもあるが、そうでなくとも黒箱とよばれていることもある。

杉、檜、桜、または桐で作られ、錠前がつけられている。

その箱の保管はきわめて重大であつて、みだりに開かず、毎年一回所有権者一同立会の上で開く以外は固くとざされ、一定の場所に保管されることもあるが、まわりもちで保管されるのを普通とする。

箱が一定の場所に保管されるときは錠がまわりもちになり、箱がまわりもちの場合は、箱をあずかるものと、錠をあずかるものとは異なり、また錠前に封印して次の開函をまつことがある。そうしたときネズミに封印紙をかじられて責任を追求されるようなことも起つている。

佐渡地方の「帖箱」は、ほぼ同じ性質のもので、その保管の厳重さにおいても似ており、古代における公共文書保存の形式を示すものと思われる。

黒箱そのものの製作年代は、現存するものについてみれば、大体徳川時代に限られ、黒箱という名称についてみれば、和歌山県有田郡栖原の

施無畏寺の文書に天文二年二月の「黒箱の事」という置文があつて、戦国末期にすでに黒箱という名称が重代の重要文書類を保存する箱に用いられてたことがわかる。

黒箱之事寺家御代々之御寄進狀置文其外古日記種々此黒箱之内納置候間當寺觀音之重寶不可過之候然處ニ依亂國寺家大破成被候而無正體事候付此黒箱方々へ隱置候然者彼方此方傳廻候箱緒然々と留置様にも□は、定箱内之物外古日記取替事可有之候若此已後自然加様之物持出如何様之人も如此なと申事候哉施無畏寺物は者なと不審不可有候爲其如此記置申候

天文貳年癸巳二月吉日

重 快 (判)
定 秀 (花押)
覺 順 (判)

しかしそれより古く、黒箱の名称はいつごろまでさかのぼりうるのであろうか。中世においては「方衆年預箱」や「ムラハコ」などの名称で呼ばれ、近世におけるように、「方衆の黒箱」や「高野辻の黒箱」などとは、すくなくとも文書には出て来ない。

そして施無畏寺天文二年の文書によれば、黒箱のもちまわりは戦国不安の時代に、一ヶ所に定置できないことにもとずいていることが知れるが、古く平和の時代においても、常設の共同事務処理機関や、それらの書類を保管する建物をもたず、またまだそれが必要としなかつた民衆としては、重要書類も箱に入れてもちまわるほかなかつたことであろう。貞和年間の文書にあらわれる「方衆年預箱」や、正平年間の文書にあらわれる「ムラハコ」という言葉なども、そうした段階における姿を示しているように思われる。

そしてこれが戦国時代をすぎ徳川時代に入つても、常住者のいない寺

社等におくよりは、もちまわりの方が安全と考えられ、もちまわりの習慣がつづけられたのではないかと思われる。

註

(1) 和歌山県那賀郡粉河町大字藤井と大字中山にまたがつて住む方衆座の人の黒箱は、一年交代で箱と鍵と別々の大字で保管される。

(2) 和歌山県那賀郡岩出町大字岡田の黒箱は、一九三七年宇野の調査当時なお嚴重な封印を行っていたが、その中に左の文書があつた。

奉誤一札之事

一、私儀去ル亥ノ年當番黒箱御預り申置候處封印等風喰せ候ニ付右ハ如何致候哉との義御尋被仰聞候處重々不調法之段何共申開無御座候元來間□故右應問此度之儀ハ何卒御救免被成下候様仕度依而不調法書一札如件

文化十三

子正月

定五郎 印

御仲間衆中

(3) 新潟県佐渡郡金泉村姫津部落はじめ各部落にある。帖箱は数人のおもち衆によつて交代保管されるが、背負えるように二本の綱をつけてあり、つねに主人の寝間の枕上に安置して、倉にしまうことを許さない。非常の際はすぐ背負つて出る。ある時代に火事のために一部分焼いたので以後その家は庄屋を辞退し、未だに村長にもなれないという話を一九五〇年七月調査のさい聞いた。

(4) 高野山史編纂所編高野山文書第十一卷

(5) 若一王子社宮講黒箱、貞和二年七月廿七日の文書に

「於正文者有方衆年預箱」

と記しているが、これは今、「方衆の黒箱」とよばれているものではないかと思われる。方衆の黒箱は和歌山県那賀郡粉河町大字中山および大字藤井に住む方衆座の人々の所有する黒箱で、旧粉河寺領莊園において、若一王子宮講黒箱が地下の黒箱の一つであるに對して、地頭側の黒箱の一つである。

(6) 若一王子社宮講黒箱、正平廿年七月十七日の文書に

「ムラハコニヤトス」

と記しているが、このムラハコとは今の若一王子社宮講黒箱をさすもので

はないかと思われる

(7) 若一王子社宮講黒箱のこと。

二 若一王子社宮講の黒箱

(1) この黒箱が文書に始めてあらわれるのは、その黒箱におさめられている「寛永十四年明神様御講日記」の寛文年間の記事である。

(1) 一、八匁御そなへの物くろ箱ひらき御き共神主所（寛文六年）

(2) 一、七分是は明神様くろ箱ひらき書物あらため申時御みき（寛文十年）

(3) 三匁三分五厘是は寺にて御黒箱開申時萬雜用 彦左衛門（延寶八年）

そしてこれ以後「御黒箱」として記され、外部的には「若一王子の黒箱」また「高野辻の黒箱」などよばれているが、古く正平廿年七月十七日、サタマイケノタニノカミノイケノタトニムスノコト」という文書に、「ムラハコニヤトス」という文句があり、この箱におさめられた当時の文書の性質からみて、この箱が古く南北朝時代には、ムラハコとよばれていたのではないかと思われる。

すなわちこの黒箱は元來、中世村落共同体の黒箱であつたが、中世村落共同体の宮座化とともに、ムラハコたることをやめて、宮座の黒箱となり、そのころから、その形状から黒箱とのみよばれるようになったのであろうか。このことは更に内容品の時代的变化によつて明らかにされる。

註 (1) 表記に寛永十四年明神様御講日記とあつて、寛永十四年から始まつている。

(2) 若一王子社のある東野は一名高野辻ともよばれているので、紀伊国名所図会（天保年間刊行）には、この黒箱を「高野辻の黒箱」ともよんでいる。すなわち同書後編三卷 在田郡、八王子社の条に

「三編に挙たる高野辻の黒箱にをさめたる巻のごとく古きものもありしなるべきに紛失せし事をしむべし」とある。

(3) 若一王子社宮講黒箱文書目録参照

(四) 若一王子社宮講の黒箱は、大、中、小、三つの箱より成つてゐる。すなわち、

(1) 長さ三尺五分、巾一尺五寸五分、深さ一尺五寸二分の外法をもつ桐の長持風の箱。

(2) その中におさめられている長さ一尺七寸三分、巾一尺二分、深さ一尺八分の外法の杉の箱。

これは外面は黒くぬられ、フタの裏面に「御黒箱入物三ヶ村延寶甲寅貳年正月吉日」と記されている。(写真参照)

(3) 長さ一尺四寸二分、巾八寸六分、深さ八寸六分の外法の桐の箱。これにはもとかさねふたをしてあつたらしいが、今うしなわれている。すすけ具合からみて深さ二寸のふたをもつていたものらしい。桐の板のあつさは三・七分。

の三つである。

若一王子の宮講は、宮寺小松院の座敷で行われるが、そのとき正面中央のゴサの上に、この第一箱がもち出され、箱のフタの上に、サカキとオミキを供え、神官がヘライをして(以前は宮講員一同般若心経を誦して、しかるのち鍵をあける。第二箱、第三箱についてはそれが行われない。

また第一箱は桐の白木の箱であるが、第二箱は黒く塗られ、かつその大きさは普通に最も多い大きさ——一人で背負い、あるいはかつげる程度の大きさである。しかしそのフタに御黒箱入物と記されている。

若一王子社宮講では、第一箱が漠然と黒箱と考えられているが、たしかめて質問してみると、第一箱は外箱だという。その場合第二箱は黒箱と考えられているようであるが、しかし第二箱は御黒箱入物とすれば、黒箱は更にこの第二箱の中にあつたのであろう。第三箱はそれにあたるものかも知れない。

思うに時代の経過とともに、文書の増加、尊重度の増加を来し、新しい大きい黒箱が作られ、またサヤバコが作られたりして、かつての小さい黒箱はその中におさめられ、黒箱としての機能を失い、外の大箱が黒箱とよばれるようになって進んで来たものらしい。

従つて「神宮寺諸有物帳天保十五年九月改」に、「黒箱壹箇」とあるのも、その単位からみて、この長持風の大箱一つをさしているらしく、「蔵入目録」にも「くろ箱壹箇」とあつて、この大箱がある時代以後黒箱とよばれてきたものらしい。

しかし三つの箱のうち、どれが黒箱かとたずねると、村人も返事にこまることは前述の通りであつて、要するにラッキョのように、すべてが一つの黒箱として生きつづけているのである。

一般には文書増加の場合、黒箱は同じ大きさのものが作られるが、若一王子社宮講の場合、古い黒箱を中に入れる、より大きいサヤバコとしての黒箱が外に外に作られた。これは黒箱——というよりは文書尊重の觀念が他村よりも甚だしく強いことによつているのであろう。

(ハ) この黒箱が天保十年紀伊続風土記、紀伊国名所図会撰集のとき學者の注目をひき、その黒箱に蔵する古文書が珍しく古いものの多いことが両書に記載されたが、百年後、一九三五年昭和十年二月の宇野の第一回調査、つづいて宇野中田協力による「高野山文書」への一部収録にい

たるまで、全く学界からかえりみられなかった。^①

これは一つには嚴重な非公開主義をとつてきたのにもよるであろうが、民衆の生活史料としてのこの価値が判るまでに、学界の水準が達していなかつたのにもよるであろう。しかし今や何人もその価値を疑うことは出来ない。その黒箱所蔵古文書の全目録は後に掲げる如きものであつて、その全古文書集刊行の準備をもすすめている。

目録をみても判るように、この黒箱所蔵古文書は、承元五年二月廿七日の文書を最古とし、中世村落生活の全般にわたり、また近世宮座組織の全般にわたり、幾多の研究題目を示しているが、しかし中でも注目されるものは、「名つけ帳」とよばれる巻物である。

それは稀有の史料である以外に、この宮講という風習の中においても従つてその黒箱の書類の中でも、最も重要な意味をもつものである。否、まずその重要さの故に尊重され、やがて稀有の史料として発展し、保存されてきたのであらう。

しかし「名つけ帳」だけが重要なのではなく、またそのみが隔絶した史料価値をもつというわけではない。

それらの容器としての黒箱、それも第二、第三のサヤバコとしての黒箱をもふくめて、その黒箱におさめられる一切のものが、尊重され神聖視されて保管されてきたのであつた。このことが民俗資料として考える場合特に重要である。

註 (1) 明治初年得能良介、キヨソネらによる宝物調査のさいも、明治廿二年重野安繹の南海探訪のさいも知られなかつた。

第三章 名つけ帳

名つけ帳は「粉河庄東村山殿座敷目録文明十年戊戌八月廿日書替之」

という標題で書き始められている長帳形式の巻物である。

古く中世から近世にかけて内部的には、その形から「長帳」とよばれたようであるが、^①今は「名つけ帳」といわれている。

しかし近世でも外部からは、「御宮座御帳面」「神株帳」「氏神御株帳」とよばれたりしていたようである。紀伊続風土記や、紀伊国名所図会では、たゞ「古き巻物」とあつて、その称呼については記していない。

長帳というのは巻物のように半紙を横につぎたし、右から左へ書いてゆく。書きおわれれば最後の所に軸木をつけてまいてゆけば右の最初の部分は一番外になる、いわゆる卷子本の体裁である。しかしかきつづけている間は右の最初の部分に仮の軸木をあてゝ巻いてゆくから、いま書いている最新の部分は一番外になつている。

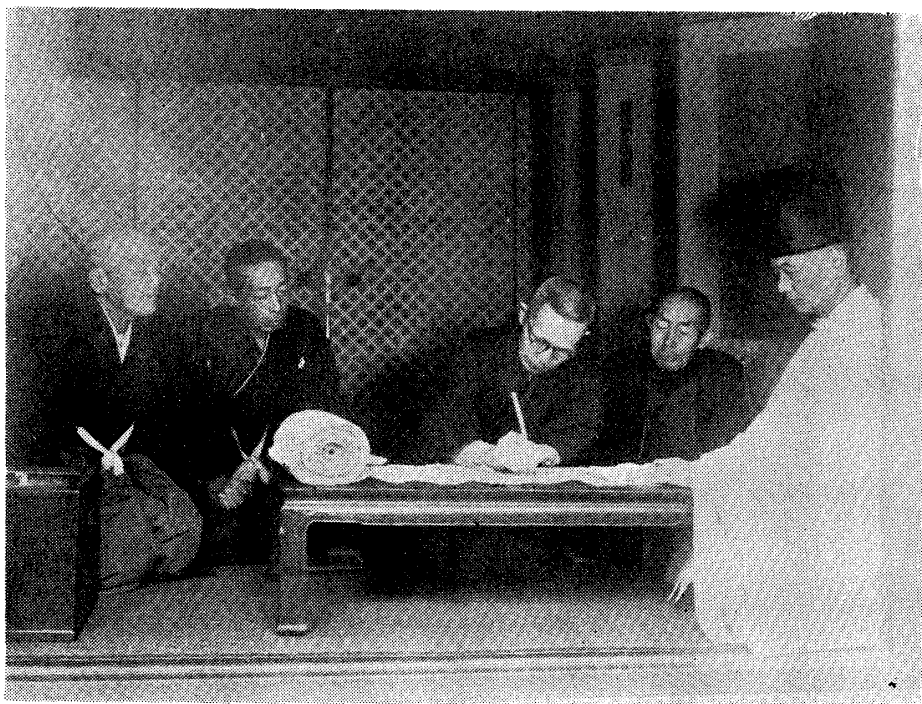
この名つけ帳も現になお書きつづけられているものであるから、このような形であるわけだ。

五百年近くつぎつぎに紙をつぎたしているので紙の巾が一定していないが——もちろん質にも変化があるが——三〇センチから三一・五センチメートル位の中をもち、一九五六年一月十三日現在の全長は七三・九メートルにおよんでいる。

巻頭は東座西座の座衆名簿に始まつているが、これに出生、入婿、入座等がかきたされ、永正七年一五一〇年のころから毎年正月十一日に、この帳の「手入れ」^④が行われるならわしが多かつたようである。

こうして記されることを近世初期「氏子打」^⑤また「うち子うち」とよんでいた。そしてこの日の行事全体を「黒箱ひらき」^⑥とも「長帳ひらき」^⑦ともよんだ。一九三五年宇野の第一回調査当時は「帳つけ」^⑧とよび、現在もそういつている。

第二次世界大戦後一九四六年より「帳つけ」は旧暦正月二十六日に行



1956年1月の帳つけ (神宮寺小松院にて)

われることとなつた。戦後の混乱は、年五回の宮講の開催の餘裕をあたえず、正月二十六日一回の集会になつたが、その日に「帳つけ」がつづけられている。

「帳つけ」は前年に生れた男児、入婿およびまれに新入座のものの名を、社守、祢宜、上四人はじめ全講員寄合の席で、一老によつて、この「名つけ帳」に記す儀式である。

母親または父親に抱かれた男の子は神前で鈴を頭上に振つてもらい、

この帳に

杉原正展貳男

啓二丸

昭和貳拾九年九月廿九日生

と記される。

新生児が四人までのときはよろしいが、それより多い年は一人は翌年まわしに記名される。これはのちに上四人になるときの都合からだという。しかしあまり古いしきたりでもないようだ。

名の下には必ず丸の字がつけられる。これは天文年間ごろからつづいている。

紙の余白がなくなればつぎたして書く。毎年二十センチほどづつのびてゆく。こうして文明年間以来四百八十年、治乱興亡の中にも脈々として書きつがれて来た。それは宮座に普遍的な座帳の一つであるが、その最も典型的なものであつて、その民俗資料ならびに学術資料としての価値はたえようがなく、まさに第一級のものといえよう。

この名つけ帳の将来は、若一王子社宮講の将来とも一致するわけであつて、それには種々の問題もあるであろうが、この重要資料を、いずれにせよこのまゝ放置すべきではない。しかも母体たる若一王子社宮講そのものが社会的変動の中に動揺している。早急に重要民俗資料の指定を申請し、その将来を検討するとともに、その価値の研究を行うべき時期にいたつているものと思われる。

ただ重要民俗資料指定のために、公開、研究等から却つてこれを損傷したりまた虫害にさらさしめないことが必要であろう。従来旧正月十一日という空気も乾燥し、昆虫類も活動しない時期にただ一回数時間のみ開き、あとは密閉して、般若蔵という土蔵に格納してきたことが、内容品の保存に最良の状態をもたらしたことであろう。般若蔵に定置される

に至つた時期はまだ明らかでない。般若蔵の名称は大般若經の蔵のいみで、今も六百巻が保存されている。（三二〇頁写真参照）

註 (1) この若一王子社宮講黒箱の中に

「長帳ノ奥書ニ

粉河庄東村山殿座敷目録

文明十年戊戌八月廿日書替之

と記した中世末期の紙があり、また「寛永十四年明神様御講日記」には、寛文年間の条に「長帳ひらき」のことがみえる。

(2) 和歌山県那賀郡粉河町東野、林英一氏談話（明治廿五年九月生）

(3) 若一王子社宮講黒箱におさめられている他の村の宮座よりの座送り証文等

(4) 「寛文十四年明神様御講日記」に、この長帳に記入することを「手入れ」ということばであらわしている。

(5) 寛永十四年明神様御講日記。

(6) 寛文元年

(7) 寛文六年

(8) 若一王子黒箱調査控（一九三六・二・三 宇野）

なお「若一王子の名つけ帳」（一九五七年六月学芸手帖 宇野）参照。

第四章 若一王子社宮講黒箱文書目録

1	粉河庄東村山殿座敷目録	文明十年八月より現在	一卷
2	大夫なり日記	寛正—永正	五点
3	（六月会大頭念仏頭童頭年々日記）	文明八年—大永三年	一卷
4	（正月十一日頭人日記）	天文十三年—元龜三年	一卷
5	（寺家納頭人日記） <small>是ヨリ奥ハ別ニアリ云々</small>	文明十年—永正七年六月	一卷
6	山殿之両頭	永正カ	一通
7	定ヤマトノレウトウノ事	応永十七年九月十八日	一通
8	氏神両頭之日記		一点
9	とうのうけ取日記	明応三年七月十三日	三点

10 りやうとう神田村々米之着日記
明応七年十月廿一日 一点

粉河寺六月会関係

11 東村安良見村相撲役相論書状
正平十三年—十四年 七通

12 定置馬頭祈願之事
応永二年十月三日 一通

13 粉河寺六月会之馬之神のまわりあし之事
永享九年六月十八日 二通

14 六月会之ミヤ／＼エ納モノ、日記
永享九年六月十八日 一通

15 六月十八日大堂之事注文状
康正三年—長祿二年 一通

16 駕輿丁相論下知
文明九年六月 一通

17 六月会入目日記等
明応五年 明応七年 八通

18 粉河寺六月会納物之事
永正十四年六月 一通

19 六月会午カミ可渡之事
大永五年 二通

20 とうさし日記
永祿四年—天正二年 七通

21 六月会次第人数日記
永祿十年—天正四年 二通

22 頭のしかけの事
天文五、六年六月三日 一通

23 粉河寺六月会馬神頭隨兵之事
壬戌六月十八日 二通

24 東村両座物云につき氏人あつかい状
一通

念仏頭関係

25 念仏頭勤帳（コレヨリ奥ハ別ニアリ）
文明八年十月 一通

26 念仏のしかけの日記
明応三年十月十一、廿八日 明応六年正月十一日 三通

法 制 関 係

27 地下のせいほうの事
延徳三年十一月廿四日 一通

28 地下定ちやう／＼の事
明応五年六月三日 一通

29 定地下おいてせぬほうの事
文龜二年八月廿七日 一通

30 地下定はんとの事
永正五年十二月廿四日 一通

31 地下定はんとの事
永正七年八月十二日 一通

32 為三ヶ村定条々事
永正十三年十月卅日 一通

33 粉河寺定提条々事
天文十三年十二月 一通

34 粉河寺定条々事
永祿三年八月 一通

35 惣禁酒
一通

36	女シヤウノモノ、トウサスマシク候事	正平廿四年十月十四日	一通
37	たのしのおきての事	明応七年三月十六日	一通
土地 関 係			
38	売 渡 証 文	承元五年三月廿七日 等	吾通
39	宛 行 証 文	建長五年正月廿六日 等	八通
40	紛 失 状	弘安元年、建武四年	二通
41	寄 進 状	文永六年十二月 等	三通通
42	安 堵 状	応永二年九月廿日	一通
43	東村丹生屋殿方指出事 <small>第二度目 両方御時</small>	文明十年三月五日	一通
44	東村丹生屋殿御知行分指出之事		一通
45	東村丹生屋殿本くてん之事		一通
46	東村丹生屋殿下地分 <small>両方江初度之時</small>		一通
47	東村丹生屋殿下地事		一通
48	東村丹生屋殿下地分		二通
49	東村比丘尼地指出事 <small>両方御知行之時 指出安文作人等</small>	文明十年	一通
50	ひがしのむらの田地帳事		一通
51	東村こうれうあんの田地之事		一通
52	らいかうちの事		一通
53	東村勝福寺免除所当之坪付事	応永十五年十二月十五日	一通
54	補任勝福寺免田下作人職事	弘安五年十一月三日	一通
55	王子田免除坪付状	嘉元三年三月十日	一通
56	東村若王子尾山タマワル時人数	嘉元三年三月十日	一通
57	永免除粉河寺東村王子田温屋田事	嘉元四年十一月四日	一通
58	本所寺家より東村勝福寺并王子御寄進庄当之事	永享五年十月三日	一通
59	敬定王子田定年之事	文明五年十二月十八日	一通
60	東村勝福寺田段錢京夫近夫坪付	貞和三年 卯	一通
61	大ケンチウノニキ	觀應元年十一月廿六日	一通
62	ケンチウノヤフセノカリ錢事	明德四年十一月	二通
63	檢注用途請取状	応永三年八月	一通
64	本屋之出伏新之日記	応永三年十一月	一通
65	檢注本屋新屋伏地日記	応永十六年十月	一通
66	大見注下ようのてう	永享二年四月	一冊
67	東村見ちうてう	永享二年四月	二冊
68	東村屋地注状	永享二年四月	一冊
池 水 関 係			
69	紀州粉河寺領東村悦谷池水注文事 <small>悦谷池水注文事 魚谷池水注文事 (東村悦谷池水注文事)</small>	永享八年五月八日	一卷
70	悦谷池分水本帳書拔	文明七年六月廿日	二卷
71	悦谷池之水日記 (悦谷池分水本帳書拔)	永正元年七月四日	一卷
72	魚谷池之水日記 (魚谷池分水本帳書拔)	永正元年七月四日	一卷
73	池分水本帳書拔断片		一点
74	見門田分水口ノ分 (みなくちの人衆)	六月十四日	一点
75	(池水の日記)	正安三年十月、延慶二年二月	一点
76	池敷粉河寺下知状	延慶二年二月	三通
77	放喜谷池敷事 (池敷免除下知状)	曆應四年二月	一通
78	池代地壳渡証文	建武元年、康永元年 康永二年、康永二年	四通
79	池役免除定状	永享八年五月	一通
80	池谷上池ノ田堵ノ人数定状	正平廿年七月	一通
81	アサノクホノ田堵ノ人数定状	永享十一年四月	一通
82	いけかかり分いけはつれ分注文	文明四年六月	二通
83	こやの谷の池かかりの分注文	明應八年七月	一通
84	文安四年自始イケマツリノトウノ日記	文安四年	一通
85	池のさかて	明應六年十一月	一通
86	池つき酒手の日記	明應十年六月十日	一通
87	ミヤノニツキ	永正十八年四月廿一日	二冊
88	堂之入目之日記		二冊
89	はんしやう・そま・わらんへにんぶ人数日記		一冊
90	王子之神事六田之御寄進之日記	永正九年九月	一卷
91	かねの勸進帳之事		一卷

92	東村極樂寺勸進帳之事	応安八年正月十七日	一冊	117	放与女子の事	永享五年十二月一日	一点
93	極樂寺造當頼母子	文明十二年九月廿五日	一点	118	雜		一〇点
94	極樂寺堂米 <small>かうや、こかわ、ねころ三ヶ寺 うちうとへあつ申米之事</small>	明応六年十二月十八日	一点	119	近世の部		
95	極樂寺年貢おさめ日記	天正二年十一月	一点	120	粉河東野山論訴状	寛永四年三月	一九通
96	舟寄進状	応永十四年三月	一通	121	御立願状之事	寛永四年卯月二日	一通
97	舟の出銭の日記	明応八年九月	一点	122	粉河東野山論書類		二通
98	フ子の新足日記	永正元年七月	二通	123	乍恐申上条々	寛永四年三月五日	二通
99	粉河庄市米之座之事	寅 八月六日	一通	124	宮講		
100	庄中出銭催促 <small>粉河より</small>	文明六年七月	一通	125	明神様御講日記	寛永十四年 延宝八年 元禄十三年	三冊
101	松井東村川論年預下知状	貞和二年七月廿七日	一通	126	御宮請当帳	寛政四年正月十一日	一冊
102	得注名夫役事粉河寺下知状案	正平十七年正月	一通	127	座送証文	享保十年—明治	六〇通
103	千手経会新足段銭粉河寺年預代下知状	永祿元年九月	一通	128	座仲間名前帳付念書一札之事	嘉永二年正月	一通
104	粉河寺里へ渡銭米日記之事	文龜三年 享祿二年	四通	129	差入申仮一札之事	天保五年一月十一日	一通
105	東村地下米借用状	天文廿一年、明応二年 永正三年、明応七年	四通	130	借用仕明神様之銀子之事	正保四年十一月	三通
106	新足預り状 <small>(東村地下預状 粉河寺安養院預状)</small>	永正元年五月廿九日	一通	131	甚右衛門書状	慶安五年一月廿六日	一通
107	東村惣分酒ての事	明応二年十二月廿日	一通	132	甚右衛門、七兵衛、長九郎通り一札之事	元文元年十一月	一通
108	地下之酒手入目日記	弘安四年 応永二年 弘治二年	一点	133	養子株定書	元文二年一月十一日	一通
109	請取状	年代不明	一点	134	座仲間定之事	元禄十五年一月廿六日	一通
110	ナワの日記他	大永六年、天文二年正月十一日 文明十八年五月	二点	135	九月神事昼座、一月廿六日明神講正月午の日朝座申合	天明九年一月廿六日	一通
111	ワラワタノ頭人日記	永正六年六月十二日	一点	136	定覚	天明九年一月廿六日	二通
112	東村御百姓等中銭米預算用		一点	137	定覚	天明九年一月廿六日	二通
113	出銭之米日記		一点	138	宮庄新田下作帳并 附屬文書	宝曆三年三月	一通
114	麦にて酒手なし申分		一点	139	御宮註文并 状通之箱	正徳三年十月	七点
115	家別之新足之日記		一点	140		享保二年九月	六点
116	納帳		一点				

138	宮修復興行願	已	一通	163	御宮下刈売払帳	弘化二年八月	一冊
139	紀伊大殿様ニ関スル書類	寛文十一年卯月吉日	一通	164	御宮山下刈売払帳	嘉永七年十二月	一冊
140	請申宮山すくろ事	貞享四年	一通	165	就御造宮諸入用覚帳	元治二年四月十一日	一冊
141	明神山風損木下附願 <small>神宮寺宛</small>	丑 二月	七通	166	就御造宮諸色取替出入帳	元治元年七月	一冊
142	田地証文(若一王子宮講宛寄進状他)	<small>寛保三年 寛政五年</small> 寛文十二年九月	五通	167	就正遷宮出氏子人別調帳	元治元年霜月	一冊
143	当社権現奉加帳	寛文十二年九月	一冊	168	就御造宮人別麦米集帳	元治元年六月	一冊
144	明神様屋根繕入用帳	宝永三年二月	一冊	169	就御造宮人別掛り銀集め帳	元治元年六月	一冊
145	御宮玉垣入用材木大工諸色	享和二年九月	一冊	170	<small>小田井筋 御宮新田開き</small> 人足調帳 他	六冊	
146	御宮山松木売払帳	享和三年正月廿四日	一冊		神 宮 寺 関 係		
147	就御造宮氏子人数しらべ帳	享和四年	一冊	171	粉河寺末寺座位事件関係文書	享保九年十一月	一六通
148	就御造宮諸色入用覚帳	文化元年卯月	一冊	172	神宮寺住持替事件関係文書	辰八月・丑六月	二〇通
149	宮山下かり市売覚帳	文化元年七月十一日	一冊	173	粉川村天福前東林寺住持替	子 五月	一通
150	御宮諸帳面仕送帳 <small>庄預用名寄帳 諸新田注文・検地帳</small>	文政三年七月	一冊	174	寺普請覚 神宮寺	寛文十三年二月	一冊
151	就御造宮諸色入用筋覚帳	文政五年三月	一冊	175	奉加帳 東之村神宮寺	元禄十五年二月	一冊
152	就御造宮他所住居人数帳	文政五年五月	一冊	176	御寄進覚帳	享保五年八月	一冊
153	御造宮入用仕上ヶ控	文政七年四月十一日	一冊	177	瓦焼立諸取覚帳	享保五年九月	一冊
154	就御造宮諸色入用覚帳	文政七年卯月吉日	一冊	178	白土上塗人足帳	享保九年三月	一冊
155	御造宮割附集物并勘定帳	文政七年	一冊	179	子年御宮寺勘定帳	享保五年極月	一冊
156	御造宮入用附込帳	文政七年二月	一冊	180	御普請費用之帳	享保六丑年正月	一冊
157	御宮山下刈売払帳	文政十三年十月	一冊	181	丑ノ春宮寺内造作仕諸事入用帳勘定覚		一冊
158	御宮馬道并ニ橋掛人足帳	天保六年八月	一冊	182	宮寺普請取替帳	享保六年八月	一冊
159	馬道作り人足覚帳	天保六年七月	一冊	183	虫附ニ付庄内祈禱造用帳	文政八年七月	一冊
160	金毘羅社勧請入用并ニ寄附名前帳	天保十二年五月一日	一冊	184	神宮寺諸有物帳 庄中	天保十五年九月改	一冊
161	上那賀東野村王子山於境内金毘羅社勧請雜記	天保十二年五月	一冊	185	御供所普請諸入用帳	嘉永元年九月	一冊
162	就御造宮入用帳	天保十五年四月	一冊	186	般若蔵并寺諸々繕ひ入用覚帳 <small>三ヶ村庄内</small>	安政四年五月	一冊

187	針金物通 粉河かちや久助	一冊
188	諸色弘覚帳	一冊
189	観音堂造作覚帳	一冊
190	餘り木代物之覚 <small>高野辻與兵衛 神宮寺建立諸色帳</small>	一冊
191	東叡山執当中回文	一冊
192	永代預り申銀子之事 <small>王子山神宮寺より 惣宮庄中</small>	一通
193	請取申瓦之事 <small>藤崎瓦屋太兵衛 庄屋肝入中</small>	一通
194	建具 覚	一通
195	神宮寺住職諷経願	一通
196	落慶供養役割	二点
197	神宮寺且中惣代返事	一点
198	社寺由緒古書籍記録調査通知状	二通
199	「当所鎮守若一王子」額の書上げ	二通
200	蔵入什器目録	一冊
201	包紙綴ひも	一括
以上 計五〇五点		

備考

- 一、目録作成にあたっては調査研究の都合上、便宜的な命名を行つた。
- 二、黒箱（大黒箱）の中には右の古文書五〇五点の他、小黒箱、中黒箱および十一面観音梵字仏像二軸とをおさめている。
- 三、一九五六年二月宇野脩平目録作成。